巴里のむす子へ

岡本かの子

巴里の北の停車場でおまえと訣(わか)れてから、もう六年目になる。人は久しい歳月という。だが、私には永いのだか短いのだか判(わか)らない。あまりに日夜(にちや)思い続ける私とおまえとの間には最早(もはや)直通の心の橋が出来(でき)ていて、歳月も距離も殆(ほとん)ど影響しないように感ぜられる。私たち二人は望みの時、その橋の上で出会うことが出来る。おまえはいつでも二十(はたち)の青年のむす子で、私はいつでも稚純(ちじゅん)な母。「だらしがないな、羽織(はおり)の襟(えり)が曲(まが)ってるよ、おかあさん、」「生意気いうよ、こどもの癖(くせ)に、」二人は微笑(びしょう)して眺め合う。永劫(えいごう)の時間と空間は、その橋の下の風のように幽(かす)かに音を立てて吹き過ぎる。

二人の想(おも)いは宗教の神秘性にまで昂(たか)められている。恐(おそ)らく生を更(か)え死を更えても変(かわ)るまい。だが、ふとしたことから、私は現実のおまえに気付かせられることがある。すると無暗(むやみ)に現実のおまえに会い度(た)くなる。巴里が東京でないのが腹立たしくなる。

それはどういうときだというと、おまえに肖(に)た青年の後姿(うしろすがた)を見たとき、おまえの家へ残して行った稽古(けいこ)用品や着古(きふる)した着物が取出(とりだ)されるとき。それから、思いがけなく、まるで違ったものからでもおまえを連想させられる。ぼんの窪(くぼ)のちぢりっ毛や、の太(ぶと)い率直(そっちょく)な声音(こわね)、——これ等(ら)も打撃だ。こういうとき、私は強

い衝動に駆られて、若し許さるるなら私は大声挙げて「タロー！　タロー！」と野でも山でも叫び廻り度い気がする。それが出来ないばかりに、私は涙ぐんで蹲りながらおまえの歌を詠む。おまえがときどき「あんまり断片的の感想で、さっぱり判りませんね。もっと冷静に書いて寄越して下さい」と苦り切った手紙を寄越さなければならないほどの感情にあふれた走り書を私が郵送するのも多くそういうときである。だが、おまえが何といおうとも、私はこれからもおまえにああいう手紙を書き送る。何故ならば、それを止めることは私にとって生理的にも悪い。

おまえは、健康で、着々、画業を進捗していることとは、そっちからの新聞雑誌で見るばかりでなく、この間来たクルト・セリグマン氏の口からも、または横光利一さんの旅行文、読売の巴里特派員松尾邦之助氏の日本の美術雑誌通信でも親しく見聞きして嬉しい。健気なむす子よと言い送り度い。年少で親を離れ異国の都で、よくも路を尋ね、向きを探って正しくも辿り行くものである。辛いこともあったろう。辱しめも忍ばねばならなかったろう。一たい、おまえは私に似て情熱家肌の純情屋さんなのに、よくも、そこを矯め堪えて、現実に生きる歩調に性情を鍛え直そうとした。

「おかあさん、感情家だけではいけませんよ。生きるという事実の上に根を置いて、冷酷(れいこく)なほどに思索(しさく)の歩(あゆ)みを進めて下さい。」

お前は最近の手紙にこう書いた。私はおまえのいうことを素直に受容(うけい)れる。だが、この言葉はまた、おまえ自身、頑(かたく)な現実の壁に行き当(あた)って、さまざまに苦しみ抜いた果ての体験から来る自戒(じかい)の言葉ではあるまいか。とすれば、おまえの血と汗の籠(こも)った言葉だ。言葉は普通でも内容には沸々(ふつふつ)と熱いものが沸(わ)いている。戒(いまし)めとして永く大事にこの言葉の意味の自戒(じかい)を保(も)ち合って行こう。

私たちがおまえを巴里へ残して来たことは、おまえの父の青年画学生時代の理想を子のおまえに依って実現さすことであり、また、巴里は絵画の本場の道場だからである。しかし、無理をして勉強せよとも、是非偉くなれとも私たちは決して言わなかった。ただ分相応にその道に精進すべきは人間の職分として当然のことであるとだけは言った。だのに、おまえはその本場の巴里で新画壇の世界的な作家達と並んで今や一かどのことをやり出した。勿体ない、私のような者の子によくもそんな男の子が……と言えば「あなたの肉体ではない、あなたの徹した母性愛が生んだのです」

と人々もお前も、なおなお勿体ないことを言って呉れる。

私たちの一家は、親子三人芸術に関係している。都合のいいこともあれば都合の悪いこともある。しかし今更このことを喜憂しても始まらない。本能的なものが運命をそう招いたと思うより仕方がない。だが、すでにこの道に入った以上、左顧右眄すべきではない。殉ずることこそ、発見の手段である。親も子もやるところまでやりましょう。芸術の道は、入るほど深く、また、ますます難かしい。だが殉ずるところに刻々の発見がある。本格の芸術の使命は実に「生」を学び、

「人間」を開顕して、新しき「いのち」を創造するところに在る。斯るときに於てはじめて芸術は人類に必需で、自他共に恵沢を与えられる仁術となる。一時の人気や枝葉の美に戸惑ってはいけない。いっそやるなら、ここまで踏み入ることです。おまえは、うちの家族のことを芸術の挺身隊と言ったが、今こそ首肯する。

私は、巴里から帰って来ておまえのことを話して呉れる人毎に必ず訊く、

「タローは、少しは大きくなりましたか。」

すると、みんな答えて呉れる。

「どうして、立派な一人前の方です。」

ほんとうにそうか、ほんとうにそうなのか。

私が訊いたのは何も背丈(せた)けのことばかりではない。西洋人に伍(ご)して角逐(かくちく)出来る体力や気魄(きはく)に就(つい)て探りを入れたのである。

「むすこは巴里の花形画家で、おやじゃ野原のへぼ絵描(えか)き……」

こんな鼻唄(はなうた)をうたいながら、お父様はこの頃、何を思ったかおまえの美術学校時代の壊(こわ)れた絵の具箱を肩に担(かつ)いでときどき晴れた野原へ写生に出かける。黙ってはいられるが、おまえの懐(なつ)かしさに堪(た)えられないからであろう。

底本：「愛よ、愛」メタローグ
　　１９９９（平成11）年5月8日第1刷発行
底本の親本：「岡本かの子全集」冬樹社
　　１９７６（昭和51）年発行
※「ちぢりっ毛」の表記について、底本は、原文を尊重したとしています。
入力：門田裕志
校正：土屋隆
２００４年3月30日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。